大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

フィン人の空間認識：カレワラを通じて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 秀雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004677

フィン人の空間認識

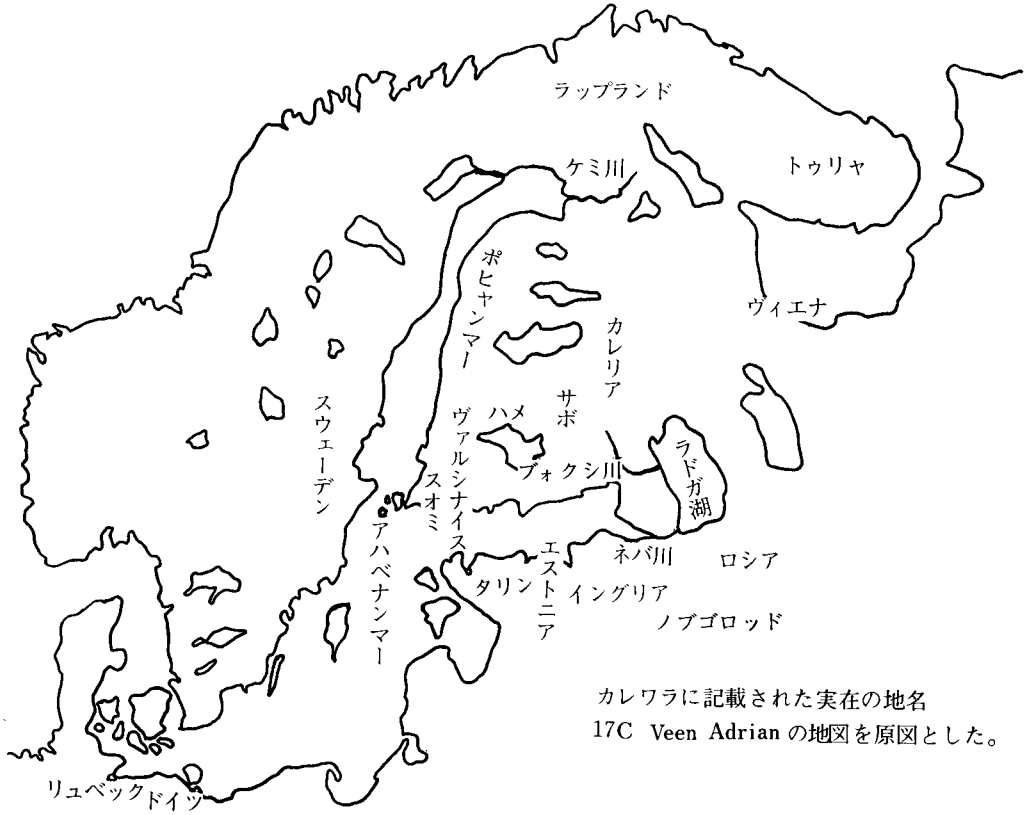
——カレワラを通じて——

塚田秀雄

I　はじめに

フィン民族文化の基盤をなすフィン語が、少数の近縁諸語と共にウラル・アルタイ語族に属し、大部分がインド・ヨーロッパ語族に包括される他のヨーロッパ諸語とは異なることは広く知られている。そのフィン民族が歌い継いできた民族歌謡をルノ runo と総称するが、レンロート E. Lönnrot は十九世紀半ば、膨大な量の民族歌謡を採集し、分類、整理した上、自らの創作した補完部分を加えて民族叙事詩を構成し、カレワラ Kalevala と題した。地方異型を含む民族歌謡の完璧ともいえるコレクションはフィンランド文学協会から刊行され、あらゆる分野での研究の基礎資料となっているが、筆者の研究の場合、レンロートによるカレワラが、彼の創作部分を除けば、フィン民族の伝統的な空間認識を探るのに十分活用される一次資料となり得る。カレワラとは叙事詩の主人公たちの住む土地の一般的表現としてレンロートが採用した地名であり、常に、ポホヨラ Pohjola と対置されて、叙事詩の空間が構成されている。すなわち、カレワの人びとが住む土地であるカレワラと北の土地ポホヨラという異質の地域軸が叙事詩カレワラの描く世界の基本をなしており、これにまつわって、多様な現実・非現実の地名が集まって、叙事詩カレワラの世界が形成されている。そこにはフィン人の伝統的な空間認識が表現され、その要素は現代のフィン人の空間の感覚にも生きているというのが筆者の考えである。そのような空間認識あるいは空間感覚は民族文化の一つの特質として捉えることが可能である。

叙事詩カレワラ、あるいは遡って、民族歌謡であるルノに歌われる物語が神話なのか歴史的事実に基くのかということは、あらゆる



カレワラに記載された実在の地名
17C Veen Adrian の地図を原図とした。

分野からのカレワラ研究において避けられぬ問題である。本稿の場合、神話であれ、歴史物語であれ、フィン人の空間認識を示すものとして資料となり得るが、逆に、この空間認識を解明することが、神話か歴史物語かという論議に何らかの寄与をなし得ると考える。

カレワラの成立時期や成立場所をめぐる論争もあり、それは、カレワラが純粋にフィン民族固有のものか否かという問題にも通ずるのであるが、カレワラの内部に、キリスト教的な考え方、記述が数多く見出され、北欧神話的宇宙観の影響も観取される。(1) しかし、それをもって、カレワラがフィン民族の伝統文化の象徴たる位置を失わしめるものと論ずることはできない。民族叙事詩が、単一の作者によって、一挙に書き上げられたものでないことは自明である。永い年月の間に、共通の構成へと進化すると同時に、豊かな地方異型を生み出してきたものであり、そこには、統一的な民族文化の成立とその内部での地方的個性の成長が想定される。この過程で、多様な隣接諸文化との交流があり、多くの要素を受けいれたはずであるから、フィン民族の伝統的な空間認識としたものは、周辺諸文化から孤立し、成立以来、民族文化内部で全く自律的に成立、発展したものとは考えられない。

カレワラを資料として利用して、フィン人の空間認識のあり方を考えようという本稿にとって、以上に記した、カレワラそのものの基本的性格、すなわち筆者が、歴史的事実を含む物語、周辺地域との交流に影響されて成立とした点はその前提となる。また全てのカレワラ研究はこの点に関して、何らかの立場を明確にしなければならないところである。従って、これを仮説とするならば、全ての研究はその証明にむけての考察を求められることを免れず、本稿もその例外ではない。

日本におけるカレワラの飜訳は、戦前に森本覚丹氏によるものがあるが、二十世紀も四分の三を経て、小泉保氏のすぐれた飜訳・解説を得た。(2) 本稿はフィンランド文学協会刊の Kalevala 24 Painos を底本とするが、日本語訳については、小泉訳を利用する。

II　地名の記載

(一) 比喩的用法

カレワラに登場する地名の内、可能なものを地図に示した。一見して明かなことは、極めて重要な周知の地名ばかりであり、隣接する国名＝Ruotsi スウェーデン、Saksa ドイツ、Venäjä ロシア、Viro エストニア、フィンランドの地方名＝Karjala カレリア、Lappi ラプランド、Pohjanmaa ポヒヤンマー（エステルボッテン）、Savo サヴォ、Suomi スオミ（ヴァルシナィススオミ）、外国の地方名＝Inkeri イングリア、Viena ヴィエナ（現在のソ連領カレリアの一部、小泉訳ではドビナ）、Turja トゥリャ（コラ半島）、河川＝Kemi ケミ川、Neva ネヴァ川、Vuoksi ヴォクシ川、Imatra イマトラ急湍、Kaatra カートラ急湍、外国の都市＝

Tanikan linna タリン、Uusi linna ノヴゴロドなどに区分できる。この他に Häläpyörä, Hornankallio, Pisänmäki などのあまり重要とは考えられない地名が登場する。更に、Juortanin joki ヨルダン川の名もあるが、キリスト教との関連を考える場合はともかく、この中東の地名は、カレワラを歌った人びとの空間認識にはほとんど意味をもたない。

これらの地名がどのような意味をもつのか、これらの土地についての具体的な記述がある場合とない場合に区分して考えることができる。

ピサ山の木を知っている、(3—172)
ホルナ岩山の松の木も。
ピサ山の木は高く、
ホルナ岩山の松も高い。
「激しい渓流が三つある、
三つの広い湖と、
三つの高い山がある
この大空の覆いの下に。
ハメにはハッラピュヨラがある、
カレリアにはカートラ急流が。
ヴォクシの流れに打ち勝つものなく
イマトラの流れを越えるものはない。」

カレワラの英雄である Väinämöinen ワイナミョイネンの賢者、詩人としての名声をねたんだ若者、Joukahainen ヨウカハイネンが不遜にも数えあげたが、ワイナミョイネンに、子供の知識、女の思い出と嘲けられた地理的知識である。ハッラピュヨラは、ハッラの逆巻く流れと訳せるから、イマトラの急湍はヴォクシ川にあることを考えれば、三つの急流を挙げていることになるが、ヴォクシ——イマトラの流れを除けば、二つの川もピサの山もホルナの岩も、不確実ながら比定できる程度の地名である。[3] ヨウカハイネンの地理的知識がそのような人に知られぬ所にまで及んでいることを示すために、このようなとりたてていうほどのこともない地名を挙げているとは考えられない。とすれば、地方的な吟誦者がたまたま歌い込んだ地名が、地理的知識の矮小さを示すためにそのまま用ちいられたとする方がよい。ここでは、その地名を挙げているだけで、その土地について、ほとんど何の記述もない。カレワラの物語が展開する世界とは関係もなく、別の川や山の名が挙げられていても不都合はない。

いくつかの地名を列挙する方法は、鍛冶イルマリネンとポホヨラの娘の婚礼の宴の準備に、食卓に供するウシを求める条にも認められる。

カレリアに雄牛が育ち、(20—17)

スオミで雄牛は肥えていた。
大きくもなく小さくもなく、
正真正銘の子牛であった！
ハメで尻尾が振られ、
頭がケミ川で揺れていた。

更にその牛の屠殺者を探し求める条で、

撲殺者を探した　(20—73)
巨大な雄牛の屠殺者を
美しいカレリアで、
スオミ最大の農地で、
ロシアの静かな土地で、
スウェーデンの勇壮な土地で、
ラップの広大な奥地で、
トゥリャの強力な土地で。
トゥオネラで探した、
大地の下のマナラで。

と歌っている。牛が巨大である事を歌った一七行以下の節では、カレリアとスオミが大きな牛を育てる豊かな土地であることが示唆される他は、牛の大きさを誇張して言うのに南部のハメ地方とラプランドを流れるケミ川の間を尺度としているにすぎない。しかし、カレリアとスオミが豊かな土地と考えられていること、ポホヨラの宴にこれらの地方から牛が運ばれたということは、ポホヨラのあり方について示唆するところがある。

牛の屠殺者を探す条では、広範囲に及んだことを示すために、あらん限りの遠い地名を挙げているだけで、その形容詞がそれぞれの地域の特質をあらわしているとは考えられない。Turja はラプランドの異名であるが、次に出る Tuonela と Manala は全く異なる範疇に属する地名であるから、別に考察する。

同様の遠隔地であることを示すための比喩的な地名の利用はカレワラで数多く認められる。例えば、サーリの美しい娘キュッリに対しては、太陽も月も星も、それぞれの息子の嫁にと申し入れたと、話は大きいが、その娘に対して、

エストニアから求婚者が　(11—43)
他にイングリアからもやって来た。

としている。

不幸な娘が婚家から帰った時に、
兄は私にとって赤の他人、　(23—769)
兄嫁はロシア女のようだ

と歌い、息子が連れ帰った新妻を

ドイツからでももらえない、　(25—289)
エストニアの向こうでも出会わない

とする場合には、多少別の概念が付随するが、遠隔、疎遠を象徴するものとして唱えられる点では同じである。なお、エストニアの向こうとしているのは、ドイツの同義語として反復・強調した用法とも取り得る。

花嫁の付添について、

花嫁の付添いをあそこで見つけ
幸せ者をあそこから連れてきた　(25—611)
タリンの城の後ろから、
ノブゴロドの向こうから。
……
ドビナの源流から
開けた白海から　(25—619)

としている。いずれも遠い場所を示す比喩として、地名が挙げられるにすぎず、それは民族詩の手法であるというべきで、カレワラで示される現実の地名は、多くの場合、場所に固有の意味——地理的な意味——が付されて挙げられているのではないことを確認したい。いわば吟誦者たちが遠くの国、土地として耳にするあらん限りの地名を歌い込んだと考えるのが妥当であろう。

なお、小泉訳で、「ドビナの源流から、開けた白海から」とあるのは、底本では、Vienan pāälilta vesilta, alapoilta aukeilta となっており、「ヴィエナの海のかなたから、涯しない海の広がりから」としてもよい。Vienan pāälilta vesilta は46—310行では、「ドビナの海の水から」と訳されている。

(二) **ドイツに関する記載**　Saksa＝ドイツという地名の現われ方は、前項で述べた比喩的用法という解釈では律しきれぬところがある。

ドイツ極上の半長靴を
美しい靴下の上へ　(18—352)

はいて鍛冶イルマリネンは装いをととのえ、ポホヨラの宴の司会者は

重宝なドイツの靴　(25—594)

をもち、川の上の白鳥のような靴と表現されている。二五章の「重宝な靴」Kelvolliset kengät という句は、一八章の場合にも、並列表現としてもちいられている。

ポホヨラでの婚礼が行なわれた屋敷では、

長椅子は鉄で作られ
壁椅子はドイツの木材で、　(21—168)
テーブルは金で飾られ
床は絹がかぶせてあった

と歌われ、その豪華さをたたえている。この記述が事実を写しているかどうかはともかく、記述は具体的であり、ドイツから持ちこま

れた財貨を貴重なもの、珍しく、高価なものと考えている点で共通している。

戦いに赴いた戦士クッレルボが家郷に残した母の死を聞いた時、彼は

死者は家で洗ってくれ
ドイツの石鹸水で、
絹布にくるんでくれ、
リンネルの布に包んでくれ！　(36—223)

と告げている。絹布にくるむことと同様に、ドイツの石鹸水で遺体を洗えというのは、もっともねんごろに葬ることを意味する比喩であろう。ドイツから石鹸水そのものが輸入されていたか否かが問題になるわけではなく、民族詩を歌った人びとの、ドイツのとらえ方が問題になる。

ワイナミョイネンがポホヨウへ求婚に出掛けるのをとがめた乙女アンニッキに対し、

まだらな羽毛の鴨の遊び場へ、
騒ぐ鳥を捕えに
ドイツの深い海峡で
開けた海原で。　(18—135)

と言い逃れようとする場合のドイツは鴨の猟場とも思えない。次々に嘘を見破られるワイナミョイネンが、苦しまぎれに、アンニッキにとっては名を聞くことはあっても、無縁の遠い土地をあげたのであろう。この場合、出鱈目にその地名が口をついて出ること自体、前項で述べたイメージがドイツについても、一般的であったことを示唆する。

マリヤッタが自分の現在と未来を考えあぐねて、

ドイツの苺よ、教えてよ、
垂れ髪で長く過すべきか
久しく家畜の牧者として
この開けた草原で
……　(50—64)

と悩む場合の、ドイツの苺も、いうまでもなく、如何なる特定の意味ももたない。

しかし、ワイナミョイネンが熊の肉を料理する際に、

それらは遥か彼方から持ってきた、
塩はドイツの国から取り寄せた、
ドビナの海の水から
塩の海峡を通って漕いできた、
船の上から降ろされた。　(46—310)

と言う場合はどうであろうか。既に述べた如く、ドビナの海はヴィ

エナの海であり、白海を意味すると考えられる。ドイツから塩を運ぶということは白海から運ぶことと同じではあり得ない。カレワラに多い、同義の語句の並列だとすれば、ドイツとヴィエナを混同するほど、彼らの地理的知識が不確実なものであることを示すことになる。また、列の如く、遠隔の地名は、ただ遠隔性を示すシンボルだとすれば、地理的常識から見て出鱈目におもえることも、矛盾を示さなくなる。一方、ドイツからも白海沿岸のヴィエナからも塩が運ばれたと考え得るだろうか。筆者の知る限りでは、ヴィエナに塩の生産はない。従って、ドイツとヴィエナの並記に関しては、遠隔地から、運ばれて来たことを示すためであり、ヴィエナに関する限り、余り大きな意味はない。

これに対し、ドイツの塩は具体性を有している。エルベ川にしろヴェーザー川にしろ、その上流に岩塩坑が古くから開発されている。ハンザ同盟の諸都市はこれらを輸出したと考えられる。海路の便宜から言えば、ハムブルクやブレーメンよりも、リュベックやロシュトックがフィンランド湾に塩を積み出していたことは当然である。フィンランド湾には、オーブ(ツルク)、ポルボー(ボルゴー)、ヴィープリ(ヴィーボルィ)などのハンザ都市が立地し、盛んに※易を行なっていたから十一世紀の初めから、フィンランドで、ドイツという名は広く知られていたという。(4)

最初にあげた、ドイツの靴、木材、石鹸水の内、靴、木材はフィンランドにも産することは確かで、別にドイツから取り寄せる必要のないものである。その語の用ちいられ方からすれば、それは上質のものということであろう。当時のフィン人では通常は眼にし得ない華美な靴やフィンランドに少ない硬材が頭にあったかも知れない。いずれにしろ、遙かなドイツからもたらされた品々が、一般民衆にとって手の届かないものであったにせよ、それらの物資と結びついて、ドイツのイメージが形成されていたといえる。塩は生活必需品であり、ドイツとフィンランドを民衆レヴェルで確実に結びつけていたと考えられる。

スオミやカレリアを中心としたフィン民族の居住地外で、カレワラに歌われる数多くない地名を考えると、ドイツの場合のみが、とびぬけて具体的なイメージを持たれていることが明かである。そこには、豊かさの感覚がついてまわるのである。

鍛冶イルマリネンが、黄金でつくった乙女の像を老ワイナミョイネンにもたらした時、詩人は次のように言って受取らなかった。

お前の乙女を火に押し込め、　(37－223)
鍛えてすべての道具にせよ、
またはロシアへ持って行け、
お前の像をドイツへやれ
金持が結婚しようと争うよう、
貴人が求婚しようと戦うよう！

このようなドイツのイメージがハンザ時代とこれに続く時代のドイツ商人の来航、来住の影響を受けていることは否定できないと考える。

(三) **フィン人の居住地**　エストニアであれ、イングリアであれ、あるいはヴィエナも文化的にあるいは民族という点で近縁関係にあったが、その土地に関する記述は、極めて観念的でほとんど具体的な内容を伴わないことは、民族的には異なっていても、古くから交渉のあったロシアやスウェーデンの場合と大差はない。これに対し、広い意味でのフィン民族、カレワラを歌い継いできた人びとが、自分たちの居住地と考えてきたはずの地域はどのように歌われているだろうか。

フィンランドには、スウェーデン統治時代から次第に地方行政組織が発達したが、フィン人の居住中心あるいは地方文化圏という点では、ヴァルシナイス・スオミ、ハメ、カレリアの南部に連なる諸州が核になってきた。[5] ヴァルシナイス・スオミとは本来のスオミの意味で、スオミというこの地域の呼称が、後に各州を包括した意味で拡大適用されるに至って、区別するために、本来のという語が付されたものである。この三州は西から東に並び、当然のことながら、西ではスウェーデンの、東ではロシアの文化的影響が強かった。カレワラのもととなった民族詩の多くはレンロートが、カレリアや更に東のヴィエナ（ドヴィナ）地方に残存していたものを採集したのである。

ハメに関しては、わずかに二度、言及されているにすぎず、比喩的用法の項で示した如く、ハッラの渦巻く流れがハメにあると、ヨウカハイネンがその知識をひけらかした場合と、ポホヨラの宴会に供される牛の巨大さを誇張して言うのに、ハメという地名が用ちいられた場合である。要するにカレワラにおいては、ハメ地方は何の意味も与えられていない。この点については、湖水地方東部で、カレリア文化圏とハメ文化圏の競合するサヴォ地方も大差はないが、妹の死の原因をつくったクレルヴォに身を隠すようにすすめて、その母が、

スオミの半島は広大で、
サボの辺境は頑強よ　(35—351)

と言う場合は、サヴォのイメージはより具体的であり、そこがどのような地域であるかを示している。隠れ住むのに適した辺境ということは、後進地域であったこととよく符合するのである。原文の sankoa Savon rajoa の sankoa が頑強と訳されるのは、筆者には不明であるが、標準フィン語の sankka の分格に当たるとすれば、森が濃密で人がはいり込めぬ状況を示すと理解できる。そのことは、辺境が頑強ということになるかも知れない。サヴォの辺境は人を通さないと訳し得るかも知れない。サヴォに関する別の記述は、

火の誕生の物語の中で、火は

さらに先へと進んで行き、
ポホヤの土地を半ば焼いた、
サポの突き出た境界を、
カレリアの両側を。　(48—255)

と歌われている。サヴォについては、サヴォの辺境の突き出た所をと理解できるが、カレリアの両側というのは、おそらく、カレリアの全てをの意味であろう。いずれにしろ、この場合は、上述の場合ほど具体的ではなく、物語の性質からしても、比喩的な表現と考えられる。

上に示した四八章の一節では、小泉氏は、poltti puolet Pohian maata をポホヤの土地を半ば焼いたと訳しておられるが、これはポヒャンマーと理解すべきであろう。次の行に出るサヴォおよびカレリアと併記され、これらは州名あるいは地方名であるから、Pohjan maa も現在の一般的表記である Pohjanmaa と同じと考えられるからである。他に、小泉氏の訳では、Pohjan maa を「ポホヤの土地」(1—20, 20—451, 49—24)、「北の国」(25—422) あるいは「ポホヤの国」(10—87) とされている。この内二〇章の宴会の準備の条でビールを醸すための火が濃い煙をたちのぼらせて

ポホヤの土地の半分を覆い
カレリア全土を暗くした。　(20—451)

とある場合には、四八章の場合と同じ理由で、州名または地方名としてのポヒャンマーと解される。同じ解釈は、ワイナミョイネンがイルマリネンに対し、ポホヨラには美しい乙女がいるから求婚せよと示唆し、

ポホヤの国半分が誉めている
彼女がたいそう綺麗だから。　(10—87)

と述べている場合の Pohjan maa にも妥当するかもしれない。

州名としてのポヒャンマーとして用ちいられている場合についていえば、サヴォやハメと同じく、言及される頻度はわずかで、その記述内容も、地理的意味を有するとは思えない。しかし、単なる比喩として地名が挙げられるのとは異なり、カレワラの物語の中での事件にポヒャンマーは関係してくる点で大いに異なっている。また一〇章、二〇章でのポヒャンマーは、カレワラでもっとも重要な地名の一つであるポホヨラとの位置関係を示唆するものである。

(四) スオミとカレリア

この二地方は前項で述べらるべきものであるが、フィン民族のエクメネの核としての重要性を考えて、別に一項を設けた。

スオミとカレリアは対置されて詩文を構成している場合が多い。比喩的用法の項で例にあげた二〇章では、カレリアで雄牛が育ち、スオミで雄牛は肥えていたと述べた後、その牛の屠殺者を美しいカレリアで、スオミ最大の農地で探すのである。この「スオミ最大の

農地」と訳されているのは、Suomen suurilta tiloilta で、同じ句は四六章では、「スオミの偉大な農場」となっている。スオミの大きな農場（複数）と解しておきたい。ヴァルシナイス・スオミはフィンランドでも最大の農場が集中していたところであり、この形容は歴史的には一貫して正しい。一方、美しいカレリアという形容は、Kaunis Karjala で、二〇章の上記の例の他に、

楽しいスオミの国において　　(43—405)
美しいカレリアにおいて、

という形であらわれる。スオミの「大きな農場」に対して「美しいカレリア」というのは、二つの地域に対し、異なる範疇に属するが、固有の概念を与えるステレタオイプとなっていると考えられる。そして、この地域が並置されることは、民衆の捉え方として、これらが自分たちの民族のエクメネーの内で、二つの異なる環境、文化圏とされたことを意味していると考えるべきである。

一方、スオミとカレリアがそれぞれ単独で述べられる時はどうであろうか。

カレワラで Suomi という場合、南西端の州である本来のスオミすなわち現在の呼称 Varsinaissuomi とそこから発してフィン民族全体の居住地を指す単なる Suomi が混用されていることに注目しなければならぬ。国名あるいは全体の呼称としてのスオミは既に十四世紀末には始まっていたといわれる。上記の楽しいスオミの国(43—405)の場合は Suomen maa で、国名を指しているとする説があるが、そうであるなら、この二行は、一旦、楽しいスオミの国でと全域を示した後で、その一部として、美しいカレリアを特に取り出していることになる。これは、カレリアを包含する上位の地域としてのスオミを確認させる効果をもっている。筆者は他の行に見られるスオミとカレリアの並記という点で、上述の如く、二つの文化圏の識別あるいは認識があったことを指摘したのであるが、国名としてのスオミとその一部のカレリアが並記されるとすれば、地域文化の差異を越えんとする十九世紀の民族主義との関係が問題となるであろう。

巨大なカマスを殺したワイナミョイネンは、その骨などを材料に、カンテレを作製し、これを「スオミの民族の楽器」(40—323)と呼び、そのカンテレの演奏を民詩では、「美しいスオミの音楽」(41—78) と称している。文脈から、ここでいうスオミは、国あるいは民族の全体を指していることは明かである。ワイナミョイネンは、熊について、

どこに長く熊は留まり、　　(46—219)
森の佳人は過していたか、
エストニアへでも赴いたか、
スオミの国から逃亡したか

と歌っているが、この場合はエストニアに対置されたフィンランドを指すことは論をまたない。

以上に対し、二〇章で歌われる巨大な牛やその屠殺者に関連して登場するスオミは本来のスオミ地方を指すと考えられることは既に述べたところである。特に「付添いの口許は可愛くて、スオミの紡錘のようだ。」(25—629, 630) という場合、小泉氏の訳注(6)によれば、カレリアと西フィンランドの紡錘の形状の違いを指摘した表現であり、ヴァルシナイススオミをスオミとしていることが明かである。ここで紡錘とされているのは、sukkulainen で、これは紡錘ではなく杼である。19—457では、梭と訳されている。

ポホヨラの女主人は、わが娘と鍛冶イルマリネンの結婚を許したあと、娘が布を織る音が

スオミの求婚者に聞えぬよう、　(19—481)
スオミの求婚者、国の求愛者に！

と心配するが、Suomen sulhot スオミの求婚者と maan kosijat 国の求愛者が同格になっているから、maa を国として捉えれば、スオミは国を指すことになる。しかし、うがった見方をすれば、maa は田舎、村方の意味があるから、スオミを田舎、スオミの求婚者、国の求愛者は、田舎者の求愛者と解することも不可能ではない。

カレリアについては、既に触れた記載の他に、ウンタモとカレルボの悲劇の序章として、白鳥の雛鳥の

一匹をカレリアに運んだ、
もう一匹をロシアの地に連れてきた、
三匹目は家に置き捨てた。
ロシアへ運んだもの、
それは商人に育った。
カレリアへ連れてきたもの、
それがカレルボに育った。

と歌っている。カレルボはカレリアで暮すがやがてウンタモに殺される。その遺児クッレルボはウンタモの下で奴隷として成人するが、

この労働者はなんにもならぬ
……
ロシアへでも連れて行こうか　(31—559)
それともカレリアへ売りつけようか
イルマリネンの鍛冶のもとへ、
鍛冶の大槌を打つように。

とウンタモは腹を立て、カレルボの息子をイルマリネンに売った。ここで注目すべきことは、ワイナミョイネンと並ぶカレワラの主人公イルマリネンがカレリアの住人とされていることである。

以上述べてきた所によれば、スオミは、カレワラの主たる舞台であるポホヨラ――カレワラの地域の外側にあり、物語の進行には直接関わりの少ない地域とされる。従って、比喩的用法として登場することが多い。これに対し、カレリアの場合、カレワラ物語の出来事の多くは、カレリアで起こっていることになる。しかし、カレリアに関する記述は必ずしも多くなく、地域としての認識はあったとしても、物語の展開はもっと狭い領域でのことと理解される。

(五)　**ラッピとトウリャ**　いわゆるラップランドはフィン語でラッピ Lappi と呼ばれる。トウリャ Turja はコラ半島の東部を指している。トウリャはラッピの別称と考えられる場合が多い。例えば、レミンカイネンの母が、

お前は呪法の詩人でない　(12―197)
ポホヤの息子と比べてみて、
トウリャ・ラップの言葉もわかるまい
ラップ語で唱えることもできまいに。

と述べて、我が子がポホヨラへ出かけようとするのを押し止めようとし、

ポホヨラの住みかへ行くでない　(12―132)
呪法のことも知らないで、
呪法の技もできないで、
ポホヨの息子の火のもとへ、
ラップの子らの領域へ！
そこではラップが呪法をかけ、
トウリャ・ラップが押しこめよう……

と述べる。一般にトウリャはラップ人の呪術性を表現する時に用いられると言い得る。一方、トウリャ Turja の変型であるルチャ Rutja はルチャの激しい流れという成句の型でつかわれ (12―463, 17―233, 423等) あまり現実的な意味を持たない。

上に示した如く、トウリャ・ラップについては、異なる言語を話し、呪法をあやつる民族としての理解があり、異文化としての認識があったことは明かである。既に触れたヴィエナの海すなわち白海の北を限るのがトウリャすなわちコラ半島であり、遠隔の土地のシムボルであった白海の更に北に広がるトウリャは遠い世界であることは間違いない。しかし、ヴィエナ、ラッピ、トウリャというしばしば併記される一連の地名はフィンランド東部から見わたす世界に属するもので、西部フィンランドの発想ではない。カレリアで採集された民詩だから、そのような視界を持つのである。

しかしラッピを単なる呪術の異民族とのみ見たわけではない。ワイナミョイネンは

ラップの子らは歌っている、　(25―429)
草の靴はく者は高らかに歌う

と、ラップ人がある種の乾草をトナカイの皮製の靴の中に保温材として詰める事を歌った後、自分たちの民族の文化とラップの文化を見事に区分してみせる。すなわち、ラップの大鹿の頑丈な肉、馴鹿の小さな脇腹（25—431）に対するライ麦の食べ物、食物に足りた口（—435）、水、松皮のパン[8]（—439）に対する穀物からの飲み物、大麦からのビール（—443）、煤けたキャンプの火、炭にまみれた寝床（—447）に対する見事な棟木、立派な屋根（—451）である。これはラップとおそらくはカレリアの衣食住についての完全な対照と言ってよい。十分現実性のある接触が両社会の間にあった事を示している。但し、松皮パンはラップのものというよりも、十九世紀になお北欧の多くで作られたものである。

ここで注意すべきなのは、ポホヤあるいはポホヨラとを結びつけ表現が多い点である。

ポホヤの遠い果てから
ラップの遥かな土地から
下生えのない開墾地から
耕してない土地から、

（17—219）

という場合の Pohjan pitkä perä, Lapin maa laukea は一三章163—164行では、ポホヤの遠い奥地、ラップの広い土地と訳されているが、北の遠い奥地、ラップの広大な地域とされたり（32—465）、小泉訳にはやや乱れがあるが、いずれにしてもここでは、ポホヤとラップを同じ意味に使っていると言える。しかし、ポホヤがポホヨラと同じ意味に使われる場合（5—230, 7—133等、レンロートの創作部分）はあっても、ラッピとポホヨラが同じとは考えられない。ラップに関する記述は上に挙げた他に、農業が不可能とか馴鹿の子を生む場所（13—123）とかで、カレワラの豊かな村とはもちろん、ポホヨラの繁栄とは縁遠い状況しかうかがえない。カレワラの世界はどこをとっても呪術が支配的であるが、とりわけ邪悪な呪術が使われる異文化の世界が、ポホヨラよりも更に北に想定され、それは実際にラプランドのイメージであったのである。

Ⅲ　カレワラとポホヨラ

(一)　カレワラ　Kaleva の民の住地を意味する地名 Kalevala

カレワラは叙事詩カレワラの題となっているが、これは編者レンロートによるものであって、民族詩の段階でこのような統一的呼称があったわけではない。民族詩に、地名カレワラが頻出するわけでもないが、Väinölä ワイニョラをはじめとする数多くの微小な地名を包括する地域名として、レンロートが適用したものである。レンロートの創作部分以外で、カレワラの地名が用ちいられる例として、ワイナミョイネンがヨウカハイネンに出会う場所が、

あのワイニョラの草原で　　(3—89)
カレワラの荒れ野で。

とうたわれたり、ワイナミョイネンを

スバントラの偉人を　　(6—234)
カレワラで最も立派な人を

と呼んだりする場合がある。ワイナミョイネンをカレワラの人、カレワラの息子と呼ぶなど、ワイナミョイネンとの関係で用ちいられることが多い(6—122他)。ワイナミョイネン以外の主たる登場人物であるイルマリネンやレミンカイネンもカレワラの住人であり、叙事詩の内の劇的な事件の多くはむしろカレワラの外で起こるが、人びとの日常生活についてはカレワラの内部での記載が多い。叙事詩カレワラは、小泉に従えば、[9]

A　大サンポ・サイクル
　(1)　サンポ・サイクル
　(2)　ワイナミョイネン・サイクル
　(3)　カンテレ・サイクル
B　レンミンカイネン・サイクル
C　結婚歌謡
D　クッレルボ・サイクル

から構成されているが、場所としてのカレワラが事件の主舞台となっているのは、クッレルボの物語であり、他はポホヨラに場所を求めることが多い。カレワラとされる地域における生活、民俗などについての具体的な描写は、二章・農業、二〇章・ビール醸造、二五章・花嫁歓迎、三二章・牧畜、四五章・祝宴、熊祭りなどに見られる。

ワイナミョイネンが海辺で拾った穀粒を、カレワの泉の近く、オスモの畑の境に蒔きに出かけた時、四十雀が囀ったという。

オスモの大麦は生えないぞ　　(2—252)
カレワのオート麦も伸びないぞ
土地を開くことなしには、
開墾地を作ることなしには、
それを火で焼かなくては。

ワイナミョイネンは白樺の木を一本残して開墾し、

北風が開墾地を焼き、　　(2—283)
北西の風が激しく吹いた。
すべての木を焼いて灰にした、
焼いて細かい灰にした。

後、大麦は思いのままに伸びたのである。

ここで開墾地とされているのは、焼畑のことである。十九世紀末になっても、まだ焼畑による穀作に依存していたカレリア・サヴォ

の状況が想起される。オスモの畑の境と訳されているのは、Osmon pellon penkere であり、pellon＝pelto は常畑を意味しており、焼畑と常畑は画然と区別されるべきものである。上の例では、施肥あるいは休閑を条件とする永久耕地である常畑＝pelto を否定して、無施肥で、koivikko 白樺林—kaataminen 伐木—poltaminen 火入れの後、播種・収穫し、放置されて、aho 放棄焼畑跡地が白樺林に再生するという、およそ二〜三〇年周期の kaskeaminen 焼畑経営がおこなわるべきことを示している。遅くまで焼畑農業が残存したカレリア地方は、常畑農耕文化と焼畑農耕文化の北欧における最後の衝突点であったことが推察できる叙述である。既に常畑の影響を受け始めていることもうかがわれるのである。(10)

ワイナミョイネンが鳥が羽を休めるためと称して切り残した白樺の木も、次世代の白樺林が放棄焼畑跡地に早く育つ目的で残される焼畑技術体系の一部であることは確実である。

一族を殺したウンタモの家で奴隷となったクッレルボの生活の描写も森林地帯でのフィン人の十九世紀以前の暮しとよく符合する。

開墾の伐採へ赴いた
高い森林地帯へ
見事な細い木立へ
凄まじい用材の木立へ。
(31—261)

ここで森林地帯と訳されている korpimaa は村落から多少とも離れた未開地であり、誰でも自由に利用できる無主地あるいは入会地である。用材、薪炭材、柵材の伐採、焼畑開墾、狩猟、漁撈、果実等の採取など、北欧一帯で耕地、草地と共にもっとも重要な経済的・社会的意味をもった土地利用形態であった。(11) 柵をつくらせても(31—310)、ライ麦の脱穀をさせても満足にできないクッレルボはカレリアの鍛冶イルマリネンに売られる。

カレワラの美しい女ロッカはイルマリネンとその新妻を迎えて、自分たちの土地を

ここでは水が小麦を粉にし、
急流がライ麦を碾いている、
……
(25—371)

おお愛すべき村里よ、
わたしのすみかとして国一番！
下には牧場、上には畑、
中ほどに村が納まっている。
(25—375)

と歌うが、氷河性の丘陵地帯であるカレリアの集落と土地利用を正確に写している。(12) ヴァーラ集落と呼ばれる小丘上の小村では、頂上部に常畑（pellot）、丘陵下の平坦部に採草地（nurmi）という土地利用が今も展開する。

第三二章では、家畜、ミルク、熊などに関する多くの呪文を収め

ており、これらは、カレリアにおける牧畜、狩猟などをよく反映しているというべきで、以上を要するに、カレワラに関する記述は、カレリアの経済生活について具体的で的確な描写を行なっている。

(二)　**サーリでの経済生活**　レミンカイネンはポホヨラでその主人を殺し、母のすすめで、九つ、十の海を越えたかなたの島・サーリに隠れ住むことになるが（二八章）、島の娘たちに訊ねる。

島には場所があるのかね、
島の陸地に土地があるのか、
白樺林の小さな隅が
そして他にわずかな土地があるか
わたしが開墾して切り倒し、
立派な焼き野を開くため？　(29—117)

かくまってはもらえるが、自分の食い扶持をどうするか考えたことは、浮気者で気まぐれなレミンカイネンにはあまり似合わない。しかし、ここで用ちいられた語は極めて興味深い。一二〇行以下の句は、ja murunen muuta maata minun kaski kaatakseni, hyvä huuhta raatakseni？であり、直訳すれば、私がカスキ焼畑を開くための、よいフーフタ焼畑を開くためのわずかな土地が他にあるかとなる。ここでは kaski と huuhta が区別されていることに注目したい。kaski は kaskeaminen が行われる土地で、もっとも一般的な焼畑であるのに対し、huuhta はマツやモミの原始林を伐って火入れするもので、いわば、開拓の最前線に見られる形態である。フーフタで営農する者は、原始林を求めて常に移動することになり、カスキの如く循環利用することはない。火入れ直後の地力は極めて高いが、急速に衰える。十九世紀末の段階では、サヴォ地方北部などに残っていたと言われる。[13]

島の娘たちは、レミンカイネンの言葉をそのまま用ちいて、島にはそのような土地がない事を告げ、その後に次のように言う。

島の土地は部分に分けられ、
畑は区分に測られて、
草野にするには籤を引き、
芝地は集会で決めるのよ。　(29—131)

韻を無視して訳せば、島の土地は地条 sarka に区分され、常畑は一片ごとに測られ、草地についてはクジで（配分を）決め、放牧地についても、民会が開かれるということである。

狭長な地条に分割された常畑は、村内の持分によって配分されるというのは、西部フィンランドや島嶼部に広がっていたアウリンコヤコ aurinkojako 太陽分割制を意味する。[14] 採草地、放牧地についての記述も太陽分割制に符合する。この土地制度はスウェーデンで発達し、フィンランドの一部にも行われたものであるが、一般には、可耕地が広く、森林の伐採も進んだ地方に滲透し、焼畑が遅く

まで残存した地方には行われなかった。

カレワラの住人であるレミンカイネンは農地といえば、カスキかフーフタの焼畑と思い込んで、島で行われていた太陽分割制については無知であったという設定で、島の娘たちがその土地制度を具体的かつ的確に説明しているのである。場所としてのカレワラを含むカレリアとこの島 Saari とで農業・農地制度が明確に識別され、それらを包摂する文化・社会の基本的な相違が認識されているのである。レミンカイネンはカレワラを船出して二月以上も海上にあった後（29—47）、島に近づくが、それを見た娘たちは

わたしたちは知らせを聞きたいわ　　（29—69）
外国からの音信を

と言い会う。彼女たちが帰りを待っていた父や兄弟や婚約者から聞きたいという気持ちとは別に、viestit mailta vierahilta、見知らぬ国からのメッセージという句は、カレワラに住む人びとの異国あるいは異文化圏に関する情報に対する渇望を反映したものであろう。

西部フィンランド的ひいてはスウェーデン的な土地制度が東部フィンランドで蒐集された民詩に、どのようにしてはいり込んだのか。森の中の村で民詩を口承してきた女たちだけが、太陽分割制を言葉の上だけで知っていたと考えるよりも、カレワラという地方の住人にとって、それはよく知られた事柄であったと考えるのが妥当であろう。しかし、それは自らの体験としてではなく、見知らぬ国、vieras maa における珍奇な習慣の伝聞としてであったはずである。あるいは、西部フィンランドに発したと言われるカレワラの故地における慣行が当初から民詩に盛り込まれ、生き残ったのであろうか。

いずれにしろ、サーリにおける土地制度の記載とそれが歴史的事実に適うこと、イルマリネンの住地であるカレワラをカレリアとしていること、そこに関する記載がカレリアにおける情況と一致することを併せ考えると、この民詩が採集された地域においては、少くとも物語の舞台をカレリアあるいは東部として歌われており、西部フィンランドを見知らぬ遠い所という認識があったといい得よう。

(三) **ポホヨラ**　既に述べた如く、叙事詩カレワラにおける劇的な事件は、主人公たちの住地であるカレワラにおけるよりも、むしろ、ポホヨラで起こっており、ポホヨラという場所の性格を吟味することは、本稿においても、もっとも重要な問題である。Pohjola は Pohja＝基礎、北と場所の接尾辞 la からなっており、北方の土地を意味していることになる。Kaleva 族の住地が Kalevala, Pohja 族の住地が Pohjola で、両者の関係が叙事詩を構成している。

一般には、カレワラの物語はカレワ族とポホヤ族の対立・抗争を

軸として捉えられている。カレワラをパイビョラ Päivölä 太陽の場所、明るい場所と別称し、ポホヨラをピメントラ Pimentola 暗闇の場所と名付けることもあり、象徴的に明暗、南北を連想させるが、これは高緯度地方の発想といえよう。

叙事詩が示すカレワラとポホヨラの関係は対立・抗争よりも緊密な結びつきが根底にあると考える。その理由は、この両地方あるいは両族の通婚関係である。女主人ロウヒが支配する女系社会と理解されるポホヨラは美人の多い所で、カレワラの主人公たちは、いずれも、妻を求めてポホヨラへ出かける。ロウヒも娘に求婚する者に対して難題を発したりはするが、手順を踏み、しかるべき資格のあることを示し得た者に対しては結婚を許すのであるから、本来は友好的な関係があることに注意したい。

例えば、ヨウカハイネンのために海に落ちたワイナミョイネンは鷲に助けられて、ポホヨラに到着するが、女主人ロウヒは

ここにいるのも結構よ、
滞在するのも楽しいさ、
皿から鮭を食べなさい、
さらにその上豚肉も。　(7—271)

と老いた詩人を無条件に歓迎するのである。

ワイナミョイネンがカレワラを恋しがるために、ロウヒはサンポ鍛造の難題を出すが、鍛冶イルマリネンを送って、その仕事をさせることで折合いがつく。このことをもって、両地方の間に、技術の交流があったとか、カレワラが先進的であったというつもりは筆者にはない。ただ、両地方について、カレワラが太陽の場所で、主人公たちの常住の地ととらえるのはよいとしても、ポホヨラをピメントラの意味するままに、暗黒の国、悪、苦痛、その他あらゆる否定すべきもののたまり場所とするのはどうであろうか。[15] カレワラに対するポホヨラという叙事詩の構図はむしろ、歴史を共有する一つの地域的まとまりの中での対立ではなかろうか。ポホヨラの女主人ロウヒが呪力を持つというが、ワイナミョイネンもその点に関しては同じである。両者の抗争についても、サンポの奪取、レミンカイネンの求婚旅行など、その原因について非はむしろカレワラの側にあるというべきである。

暗いポホヨラ、霧深いサリオラという決まり文句の内容を説明する文言は数多く見られる。ワイナミョイネンはポホヨラについて、

人を食べるという場所で、
男を沈める所で　(18—198)

といい、霜の呪文では、

霜は柳の下に生まれた
厳しい冷気は白樺の林に　(30—217)

ポホヨラの住まいの裏で
ピメントラの居間の端で

と歌っている。レミンカイネンの母は、

そこには剣を腰にした人がいる、
武具をまとった男たちが
酔ってのぼせた人々が、
たいそう飲んで悪者が。　(26—281)

と強力な戦士の集団の存在を示唆する。

しかし、ポホヨラの主人の家では、

掃除する牛舎が大きくて、
見てやる家畜も数多い、
硬く石臼が厚い上、
篩うパン粉が細かいの、

と堅実な暮しが見られ、イルマリネンと娘の結婚に際しては、

桶百杯の食肉と
百尋の腸詰と、
舟六艘分の血潮と
六樽分の脂肪が得られた、　(20—113)

と歌われた。その宴会のためのビールを醸せば、大麦を煮る火の煙はポホヤンマーの半分を覆いカレリア全土を暗くしたというのは、ポホヨラの財力の大きいことを示している。その新婚夫婦のための住居も壮大なものとされている。ラップに関する記述では文化の違いや貧困が強調されるが、ポホヨラに関しては、時に抗争するが基本的には、隣りあった二つの地域集団はより大きい地域文化圏の内に包摂されていると考えるべきである。ただカレワラにおいて豊かな記述の見られる農業に関しては、ポホヨラについて多くは認められない。

(四) カレワラとポホヨラ

カレワラはカレリア地方に属するとされるが、ポホヨラはどこかを大まかにでも規定することは叙事詩の文言からは困難である。ポホヨラとカレワラ間の行程は、橇で三日(10—16)とする場合と騎馬で三日(二六章)としている場合があるが、万事誇張した表現の多いこの叙事詩においては例外的に近接した位置関係として捉えられている。カレワラからサーリへ行くのには船で二ケ月以上を要している(29—47)ことを考えれば、ポホヨラとカレワラは極く近接した地域であったと考えられる。

カレワラについてはともかく、ポホヨラの位置をどこに想定するかは、特に叙事詩の内容を歴史的事実とする立場にとっては重要で、クローンはスウェーデンのゴトランド、エイノ・ユティッカラはエテラ・ポホヤンマーとするなど、西方とする者が多い。[16]

レンロートはルノを主にカレリアで採集しているが、その発生は西部フィンランドだとする説が有力である。[17] 筆者は西部でうたわれ

たルノがカレリアを舞台にするとは考えない。カレリアで歌われたのは、カレリア風に変型したものであろうと考える。叙事詩の元の題材たる歴史的事実が西部におこったとしても、別の地方に流布するに従って、舞台は歌う人びとに親しい場所に、背景描写も同様に歌われる場所の環境に適応したはずである。

叙事詩の中でカレワラという地名が一般には用ちいられないことも、歌い手、聴き手のいずれもが、自分たちの周辺にカレワラを想定できて都合がよい。カレワラがカレリアの一部というのも、地域についての記述がそうであるのは、カレリア異型である以上は当然で、それ以外に論拠となるのは、イルマリネンについてカレリアの人間であると述べられている点だけである。

フィンランドのどこがカレワラかということとは別に、ポホヨラは環境を理解するのに必要な概念で、特に明暗の対照、南北の対比という極立った二元的な環境の中で、社会的な対立を象徴化したものであろう。

Ⅳ　マナラとトゥオネラ

前章までに述べてきた各地域は、様々な眼鏡を通して表現され、その性格を明かにすることは必ずしも容易ではないが、ここにいうマナラ Manala またはトゥオネラ Tuonela は紛れもなく死者の世界、冥府といえよう。

マナラとトゥオネラはほとんど常に併記されており、その一つの現れ方は、

もしわたしにこの世から
別れる時が
マナへ行く時が
トゥオネラを訪れる日があったとしても。　(4—281)

というように、死者の国、忌むべき国を想像して物を言っており、これは他にも多くの用例がある（4—125）が、単に言葉を並べて死を想定するだけである。

この冥府に入るにはトゥオネラの川あるいはトゥオニの川を渡るのであるが、これから先は完全な物語の世界であるならば、フィン人の伝統的な世界像も単純明快である。しかし、叙事詩の主人公たちはこの川を越えて彼岸と此岸を往来する。

マナラ Manala はクローン K. Krohn の説によれば、Maan ala 土地の下である。地下の世界を意味している。[18]

レミンカイネンはポホヨラの女主人ロウヒの娘と結婚せんがために、ロウヒの言うトゥオネラの川の白鳥を取りに出かけるが、ポホヨラの盲の老人マルカハットゥに殺される。死体はトゥオネの息子によって切り刻まれ、トゥオネラの川に投げこまれて下流のトゥオネラへ流れるのである（一四章）この場合、レミンカイネンは死

後、マナラあるいはトゥオネラへ行く。

息子の死を知ったレミンカイネンの母はイルマリネンの作った熊手で息子の体の部分を拾い集め、遂には息子を復活させる。この場合、母親は死後にこの世界に到達するのではなく、川にたち込んで、熊手を使うというのである。

ワイナミョイネンは船を造るに当たって、仕上げの呪文がわからずに、それを知るためと錐を得るために二度トゥオネラへやって来るが、トゥオニの娘は次のように言う。

まあ、ワイナミョイネンあんたは！　(16—284)
殺されないのにマナへ来た、
死にもしないでトゥオネラへ。

その問答の中で、トゥオニの娘はそこを訪れる人びとは全て死者であるはずだとしているのであるが、その死因は病気、老衰、戦死、水死、焼死などを想定している。一旦この冥府に足を入れた以上、ワイナミョイネンも止めおかれる筈であったが、呪術を使って脱出、生還する。そして自ら、トゥオネラを訪ねることをタブーとするのである。

このようなマナラ、トゥオネラは地下の世界とされているが、現世の世界とはどのような関係にあるのであろうか。

レミンカイネンはポホヨラの女主人に暗示を受けて、ポホヨラから歩いて行っている。しかし後にレミンカイネンを殺すことになるマルカハットゥはトゥオネラの岸辺で彼を待ちぶせる。ポホヨラから帰るまで、故郷へと向かうまで（12—503, 4）、待つのであるが、その場合、ポホヨラとカレワラの間にトゥオネラがあることになる。

レミンカイネンの母の場合は太陽の助けを得ているが、ポホヨラの女主人との問答では知り得なかった、息子がマナラの永遠の水（15—190）の中に捨てられたことを、太陽から告げられる。詩文の上ではイルマリネンに熊手をつくらせたあと、カレワラからトゥオネラの川へ駆けて行く。

ワイナミョイネンは呪法の言葉を求めて、三週間歩いてトゥオネラの川の岸辺、マナラの島、トゥオニの丘が見えるところにやってくる。

イルマリネンはポホヤの女主人の娘に求婚して難題を出されるという点では、レミンカイネンと同じ立場におかれるが、娘に気に入られてその助言を受け、

「さあもう、蝮の畑を耕し、　(19—321)
毒蛇の土地を掘り返した。
マナラの狼に勒を付け、
トゥオニの熊を鎖でしばった。
巨大な鱗鮰を捕えた……。」

といって、母親に対し、娘を要求する。

以上の如き、トゥオネラ、マナラのあり方は、ワイナミョイネンの場合を除いて、ポホヨラとの深い関係を示している。ポホヨラの女主人は何かと言えば、マナラを持ち出してカレワの住民を困らせる。これはワレワの住民がポホヨラに対して抱く感情を示唆するもので、背後にある冥府との仲介をする如き役割を付して、ポホヨラの性格をカレワラ流に解した結果であろうか。ポホヨラがマナラに近いものとすることが、カレワラの住民の望む所であったのであろう。

ワイナミョイネンの場合も彼が並はずれた呪術者であったから、ポホヨラを介在させることなしにマナラと接触し、無事に帰還することができたのであって、一般のカレワラの住民にとって、マナラは禁忌の世界であった。生者と死者を共に容れる世界像を持とうとすることは不思議ではない。むしろ死者の世界にある種の具体性を持たせることも必要なはずで、その意味で、カレワラの民にとって、たとえそれが、地下の世界であっても、世界像の中には、マナラが重要な部分として組み込まれていたのである。

V　おわりに

叙事詩カレワラに登場する地名が物語の中で付された役割、土地に関する記載の具体性などを検討して、フィン人の空間認識を探ってきた。

記載の具体性については、カレワラにおける焼畑農業、サーリにおける太陽分割制、ラプランドとカレワラの衣食住の対比、この三点に関して、極めて的確・具体的というべきである。フィンランド周辺における三つの主要文化圏が明確に識別されている。しかし、ラプランドとサーリは別の圏域に属しカレワラと直接関係しないにもかかわらず、場所がはっきりと比定できる。サーリはフィンランドとスウェーデンの間のアハヴェナンマー（オーランド諸島）と考えるべき理由がある。

叙事詩はカレワラを主舞台にするのではなく、カレワラとポホヨラをあわせて、一つの領域を考えている。対立・抗争も含めて、両者の基本的には相互に密接に関連しあった地域の単位と考えられる。両者は場所を特定する材料に乏しく、これに関わる周辺地域の現実の地名は全く記載されない。これは地名をかくすことにより、カレワラとポホヨラを観念化・一般化することになって、フィンランドのどの地方であれ、ルノが歌われる所はどこでもカレワラたり得ることを意味する。

フィン人の居住域であれ、周辺諸国であれ、現実の地名が登場する場合は、ほとんどが、奇異なあり方か遠隔性を表現する場合の比喩としてであることは、いわばそのような地名を盛り込まなくても叙事詩の構成に不都合はないわけであるが、それぞれの地名・土地が叙事詩の展開に大きな意味をもつならば、このような使い方は有

り得ない。それはとりもなおさず、地域名としては、耳にすることもあるが、さほどの関心も払わない地域、いわば外部世界としての認識である。

ドイツが比較的大きい関心を持たれ、特に経済的な関係が示唆されるのは歴史を反映している。

カレワラを中心として第一次の圏域があり、ポホヨラを含めて二次の圏域があるとするのは、フィン人あるいはカレワの住民の主観的な地域観であり、筆者は既述の如く、ポホヨラとカレワラを併せて、叙事詩のほとんど唯一の空間的広がりとしたい。

そこから離れた異質の世界ではあるが、何らかのつながりが強く意識されるのが、ラッピ、サーリ、ドイツである。

最後に、この叙事詩の空間構成に強く見られる南北軸の感覚あるいは認識に注目したい。

ポホヨラという命名そのものがフィン人の北方に対する関心を示すが、この詩の中で、カレワラは舞台の南端と捉えることができる。多くの事件は、マナラも含めて、ほとんどがカレワの人間の北方への強い関心に関係している。ポホヨラとその彼方にあるラッピはワレワラの人が何かを求める土地であり、カレワラの人間の幸福も不幸もすべて北方からもたらされる感がある。これはフィンランド湾を北へ渡ったフィン民族が常に北方にむかってフロンティアを前進させてきたことを反映し、同時に、北方志向がフィン民族文化の中核にあることを示している。

注

(1) 五〇章のマリャッタ、二章の樫の巨木の話など。

(2) A 森本覚丹訳:「カレワラ」1937、岩波書店。B 小泉保訳:「カレワラ」1976、岩波書店。小泉氏の訳書には、研究史を含むすぐれた概説が付されている。

(3) Turunen Aimo; 「Kalevalan Sanat」 参照。本書はカレワラ辞典である。1976, Lappeenranta.

(4) Wuorinen, J.: A History of Finland. 1965. New York & London. p. 45.

(5) Jutikkala, E.: Suomen Talon Pojan Historia. 1958, Helsinki. pp. 11-16.

(6) 前掲(2)B下、p. 390.

(7) 1970年代のフィンランド領ラップランドで筆者は実際に見た。

(8) 松皮のパン Pettu leipä はパンの増量材として松の皮の裏の白い部分を剝ぎ、乾燥・粉末にしたものを使った。

(9) 前掲(2)B上 p. 432.

(10) Soininen, A.: Vanha maataloutemme. 1974, Helsinki. に詳しい。

(11) 前掲(5)、pp. 28-32.

(12) Aario, L.: Suomen maantiede. 1966, Helsinki. pp. 119-120.

(13) 前掲(10)に詳しいが、日本語による発表要旨として、塚田秀雄：フィンランドの伝統的農業とその近代化。1982「人文地理」34—1、がこの問題に触れている。

(14) 塚田秀雄：フィンランドにおける農業革命、「奈良大学紀要」5, 1976.他。

(15) 前掲(3) Pohjola の項参照。

(16) 前掲(3)

(17) 前掲(2)B上、pp. 437-439.

(18) 未見。前掲(3) Manala の項参照。